

## ハガイ書1-2章「主の家を建てよ」

### 1A「現状をよく考えよ」

1B まだ時ではないという言い訳 1-2

2B 自分の家探し 3-11

3B 御声に聞き従う民 12-15

### 2A「後のことを考えよ」

1B 以前に輝く栄光 1-9

2B 再建の日からの祝福 10-19

3B 選び取られるゼルバベル 20-23

## 本文

ハガイ書を読んでいきます。私たちはいつも、午後礼拝で一節ずつの学びをしますが、今朝は午前にて、二章分を一節ずつ読みます。私たちは、小預言書を読んできましたが、前回のゼパニヤ書まではバビロン捕囚の前に主が与えられた預言を読んできました。けれども、最後の三つの預言書、ハガイ書、ゼカリヤ書、そしてマラキ書は、バビロン捕囚の後に主が語られたものです。帰還した民に対して、主が叱責を与え、励まし、また慰める言葉を語っておられます。

そして、これらは再建する神殿に関わることです。イスラエルの民は、バビロンによってその神殿が滅ぼされ、エルサレムは廃墟となりました。しかし主は、エレミヤを通して、彼らに対する計画は七十年であると言いました。七十年後に、彼らは散らされた地からエルサレムに帰還することが約束されていました。それを主は、「幸いな約束を果たす。その計画は、災いの計画ではなく、将来と希望を与えるためのものである。(エレミヤ 29:10-11 参照)」と言われました。そして、事実、エズラ記を読みますと、バビロンを倒したペルシヤの王クロスが、ユダヤ人に帰還して、自分たちの神のための神殿を建設するようという布告を出します。異教徒の王が、主なる神のための建物を建てなさいと命じるということは、驚くべきことです。

私たちは、神から幸いな約束が与えられています。キリスト者は、神を愛しており、神を愛する者には、全てのことが善のために相働くという計画があることを、ローマ 8 章 28 節は教えています。しかし、それらには労苦がない、努力がないということではありません。主は、必ずご自分の始められた良い働きを、キリスト・イエスの日までに完成されますが、私たちの信仰の忍耐と、愛の労苦、そして希望の中に生きるということを通して、その働きを完成されます。イスラエルの民も同じでした。

彼らは、捕囚の身と言えども、七十年も経っていますから住み慣れた土地から離れることは、勇

気が要ります。ペルシヤの地に散っているユダヤ人たちでエルサレムに戻ったのは、五万人そこそこでした。全体として考えたら、本当に少ない人数でした。そして、そこに戻ったら、エルサレムは荒れに荒れていました。神殿のための資材は、クロス王が命じて、ペルシヤの国庫からの援助はあったものの、かつてソロモンが建てた神殿に比べたら、取るに足りないものでした。彼らはまず、祭壇を立てて、いけにえをささげて主を礼拝し、神殿の礎を築きました。そして工事を開始することができたのです。

ところが、エルサレムとユダの地域には、既に地域住民の影響力が強くなっていました。そこには、「サマリヤ人」と呼ばれる人々が住んでいました。かつてアッシリヤが、滅ぼした北イスラエルに異国人を移住させて、それでイスラエル人と異国人との間に生まれたのがサマリヤ人です。彼らは、かつての信仰の一部を受け入れていましたが、異教の儀式も取り入れた礼拝を行っていました。イエス様に対してサマリヤの女が、「私たちの先祖は、この山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。(ヨハネ 4:20)」と言ったのはそのためです。このサマリヤ人たちが、神殿建設の工事を始めたユダヤ人に対して、「私たちも神殿建設に関わらせてください」と言ってきました。ユダヤ人たちは断りました。するとサマリヤ人は態度を豹変させて、ペルシヤの役人を取り組んで、猛烈な建設阻止工作を展開させたのです。その地域の役人たちがペルシヤ王に対して、ユダヤ人たちが税を納めることをやめるだろう、そして過去そうであったように王に反逆するであろうという内容の手紙を送りました。その手紙は受け入れられて、実力行使で建設を止めさせたのです。

そして今、もう16年ぐらい経っています。けれども、エルサレムに住むユダヤ人たちに二人の預言者が立ち上がりました。ハガイとゼカリヤです。二人の預言活動によって、ユダヤ人たちは神殿建設を再開させました。「さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツアダクの子ヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。(5:1-2)」再び周囲住民からの反対にあったのですが、今度彼らは、圧力に屈することなく黙々と工事を続けたのです。それで反対者らが、当時のペルシヤの王ダリヨスに手紙を送り、返ってきた王の返事は、「工事を止めさせるな、むしろ彼らの建設に必要な材料を調達せよ。」でした。クロス王が神殿を建てよ、と言った文書が保管所から出てきたのです。このように彼らを変えた預言とは何だったのか、その言葉の力を私たちは、ハガイ書で見つけることができます。

主は、私たちが福音の働きのため、神の国の前進のため、用いておられます。教会を通して用いられます。主は、教会を神の家として建てられておられます。その中で、ある時はあまり苦もなく、戸が開かれる時もあるでしょう。しかし、反対者が多い時もあります。帰還したユダヤ人のように、労苦が多い時もあります。そして、主が語られたことに比べたら、自分たちのしていることが、あま

りも小さく、取るに足りないようにさえ感じます。その分量や困難に圧迫されると、私たちは恐れから、また疲れから、「神の国とその義を第一に求めなさい」ということを、あきらめてしまうことがあります。それらの困難を避けたところで、生活が改善するわけではありません。いや、現状をよく見れば空回りしているのです。主は、ユダの民に対して主の家を建てなさいと励まし、彼らが工事に着手しました。私たちもまた、神に後ろから押されるようにして、「神の家を建てなさい」と命じられているのです。

## 1A 「現状をよく考えよ」

### 1B まだ時ではないという言い訳 1-2

1:1 ダリヨス王の第二年の第六の月の一日に、預言者ハガイを通して、シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアとに、次のような主のことばがあった。

時は、「ダリヨス王の第二年の第六の月の一日」とあります。ペルシヤ王ダリヨスのことですが、紀元前 520 年です。これまでが、イスラエルやユダの王の治世における預言だったのに対して、ここで外国の支配の中に彼らが置かれていることが分かります。他の預言書と比べると、正確な日時が記されているのが珍しいです。「第六の月の一日」とあります。大麦の収穫の始まる過越祭が四月初頭にあり、それが第一の月です。第六の月の一日は、太陽暦では 520 年 8 月 29 日です。この時は、ぶどう、いちじく、ざくろなど夏の収穫が取れる時期です。そして、一日は、「新月の祭り」があります。祭りを祝う時でした。ハガイという名前の意味は、「祭り」です。ですから、彼らの祭りの時に、ちょうど祭りという名の預言者が語り始めたのです。

ハガイの預言を聞いた指導者が二人います。一人は「ゼルバベル」です。彼はダビデ家の直系の子孫です。バビロンに捕え移されたエコヌヤの子が「シェアルティエル(1歴代 3:17)」で、その子がゼルバベルです。マタイによる福音書1章にあるイエス・キリストの系図にも、彼が「ゾロバベル」という名前が出てきます(12 節)。ですから彼は王なのですが、今はペルシヤ帝国が支配していますから、もはや自分を王と言うことができない状況にいます。「総督」と呼ばれています。イスラエルが紀元前 586 年にエルサレムの町と神殿をバビロンに破壊されて、捕え移されて以降、自分たちの主権を持ち、独立国になったことはありませんでした。イエス様がオリーブの山で弟子たちにお語りになった、「異邦人の時」が始まっていました(ルカ 21 章)。

そしてもう一人が、「ヨシュア」です。彼は、正統な「ツァドク」というアロン直系の大祭司の子孫です。彼の父エホツァダクが、586 年にバビロンに捕え移されました(1 歴代 6:15)。この彼とゼルバベルのコンビで、神殿再建の事業を推し進めました。ゼカリヤの預言に、二人の名前が頻繁に出てきます。そして両者とも、後に来られるキリストを表しています。ゼルバベルは王としてのキリスト、ヨシュアは大祭司としてのキリストです。

1:2 「万軍の主はこう仰せられる。この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。」

主は、ユダの民に叱責を与えておられます。まず、「この民」と呼んでおられますね。神の所有の民であり、神は普通「わたしの民」と彼ら呼びますが、今彼らは、神の所有の民のように生きていないので、そのじれったさ、怒りがあって「この民」と呼んでおられます。なぜか？「主の宮を建てる時はまだ来ない」と言っていたからです。彼らは、住民からの反対を受けていた。そして、資材もなかなか集まらないし、働き手も不足している。あまりにも途方もない事業に見えます。このような困難に遭っているのは、「主の時ではないからだ」と判断したのです。

困難があるということが、すなわち主の時ではないということが私たちは言うことができるのでしょうか？むしろ、福音の働きにおいて快適な場、金銭に余裕のある場のほうが少ないとも言えます。新しい働き、多くの働きを神が用意されていますが、その新しいところには困難が待ち受けています。しかし、主は不思議な方法で、うまくいっていないように見えて、反対や困難があるように見えて、それらをかえって用いられて、ご自分の働きを前進させます。パウロの宣教旅行がそうでした、彼は一見矛盾したことをコリント第一で言っています。「というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。(1コリント 16:9)」福音のための広い門が開かれているからこそ、反対者が大勢いると彼は言っているのです。

私は、自分たちがアメリカに引っ越した時のことを思い出します。チャック・スミス牧師の下で養われたい、訓練を受けたいと強く願っていました。ところが、全ての準備を終え、会社には退職願いを出し、引っ越し荷物も出しました。すると、これから入学するはずのスクール・オブ・ミニストリーから、「あなたは受け入れられません、学校が閉鎖されるからです。」という一通の手紙が来ました。それでも、私たちは引っ越したのです。向こうに着いてからも、続くという話もあり、また、いや続かないという話もあり、混乱していました。その時に、ある人から言われたのです。「御心ではないのに、なんで御心に反してここに引っ越してきたの？」結果は、学校は続き、私は卒業し、それ以来、カルバリーチャペル・コスタメサが自分の信仰の故郷、母教会となったのです。そして、ロゴス・ミニストリーが始まり、カルバリーチャペル・ロゴス教会が始まったのです。困難があることが、そのまま主の時ではない、御心ではないということではないのです。

## 2B 自分の家探し 3-11

1:3 ついで預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。1:4 「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。」

主の家を建てる時はまだ来ていない、ということは、尤もな意見に聞こえます。しかし、その時が来ていない時に彼らが行っていたのは、「板張りの家に住む」ということでした。彼らは、主を熱心に待ち望んでいたのではありません。時が来ていないと言いながら、実は、彼らの持っているエ

エネルギー、力や財力を自分たちのために使っていたのです。私たちは、前進しないで、主から立ち止まりなさいと命じられる時はあるでしょう。彼らは、前進しなかったのですが、それでそこにしっかりと堅く立って、待ち望んでいたのではなく、霊的に後退していたのです。「神の国とその義をまず第一に求めなさい。」ということをしていなければ、必ず、何を着ようか、何を食べようか、どこに住もうかという、自分自身の生活に関わることを第一としていってしまうのです。ですから、自分の生活を建て直してから主の家を建てようとしたら、永遠のその建設は滞ることでしょう。

1:5 今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。1:6 あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。

「あなたがたの現状をよく考えよ。」と主は言われます。自分は時に、自分を忘れることがあります。自分がどのような現状になっているか、自分は分かっていると思っていながら、実は分からなくなっている時があります。そして頭を使わない、よく考えない、じっくりと自分を吟味していない、ということが起こるのです。そして現状をよく考えると、実は、彼らが焦燥感をもって求めているものは、得られていないことに気づきます。私たちは、求めようとすれば、それを得られないことに気づき、さらにそれを求めようとしていきますが、まだ飽き足りません。満ち足りることのない生活が続きます。

1:7 万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。1:8 山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現わそう。主は仰せられる。

もう一度、現状をよく考えよと繰り返しておられます。そして、具体的に「山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。」と命じられます。そうです、手を動かすのです、足を動かすのです。労するのです。頭で理解するのではなく、体で理解するのです。体で理解するとは、実践することによって、行動に移すことによって、後でそれが何であるかが分かるというものです。私たちはあまりにも、「理解できないと、行動できない」という思いに囚われます。実は、その反対の場合が多いのです、「行動に移したら、理解できる」のです。

ここでは何でしょうか、「わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現わそう」とのことです。主が私たちの行動や働きを、喜んでおられることを知ることができます。そして、主の栄光を現してください。かつて、ソロモンの神殿において、その建築は大層豪華でしたが、偶像礼拝を行なったことによって、その栄光が神殿から去ってしまいました。けれども、今、どんなにみすぼらしい建物に見えたとしても、そこに神の栄光が現れるという、すばらしい約束があります。神の栄光とは、教会にとってはキリストのすばらしさ、キリストの義、キリストの恵み、キリストの愛が現れることです。私たちキリスト者が部分となって結びつき、共に働いているところに現れるのです。

1:9 あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。・・万軍の主の御告げ。・・それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。1:10 それゆえ、天はあなたがたのために露を降らすことをやめ、地は産物を差し止めた。1:11 わたしはまた、地にも、山々にも、穀物にも、新しいぶどう酒にも、油にも、地が生やす物にも、人にも、家畜にも、手によるすべての勤労の実にも、ひでりを呼び寄せた。」

イスラエルは地中海性気候の地域に位置します。したがって冬は雨季、春夏は乾季の気候です。作物は乾季に育てることになりますが、そのときの水分補給で重要なのは「露」です。主はそれを降らすことをお止めになっておられました。これらの言葉は、主が、モーセによって警告しておられた災いそのものでした(申命記 28 章)。彼らがこれらの呪いを受けて、それでバビロンが襲ってきてエルサレムが破壊され、奴隷として捕え移されていったのに、その再現がまた始まろうとしていたということです。あれだけ悔い改めて、もう二度と後ろには戻りたくないと彼らは強く願っていたことでしょう、けれども、今、そのまさかが起こり始めようとしていました。

主は、私たちが快適なところにおいて、前進することを怠ったままにさせないために、このように徴を与えられることがあります。「今、この場にいたらだめになってしまう、霊的に死んでしまう。」という徴を与えられます。

### 3B 御声に聞き従う民 12-15

1:12 そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアと、民のすべての残りの者とは、彼らの神、主の御声と、また、彼らの神、主が遣わされた預言者ハガイのことばとに聞き従った。民は主の前で恐れた。

すばらしい言葉があります、「聞き従った」という言葉です。これまで、バビロン捕囚になるまで、主の御声に聞き従わなかったという、頑なな心をずっと読んできましたが、ここでは聞き従ったのです。ここに、主のすばらしい御霊の働きを見ます。先ほどから、「主のことばがあった」とか、「主の御告げ」とか「万軍の主はこう仰せられる」という表現が頻繁に出てきています。預言書には多い表現ですが、ハガイ書は短い預言書なのに非常にたくさん出てきます。かつて、御言葉の飢饉があったことをアモスが預言しました(8:11)。偶像礼拝を行ない、富に溺れていたからです。しかし今は、主がはっきりと語っておられるのを、聞くことができていたのです。

そして、「主の前で恐れた」とあります。神への健全な恐れは非常に大切です。聖書に、人への恐れと神への恐れを比較している箇所があります。イエス様が弟子に言われた言葉です。「ルカ 12:4-5 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげ

ましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」彼らはサマリヤ人を恐れて、それが畏となっていました。が、人を恐れず、主を恐れたのです。

1:13 そのとき、主の使いハガイは、主から使命を受けて、民にこう言った。「わたしは、あなたがたとともにいる。…主の御告げ。…」

主が共におられる、というこの一言の約束は大いなるものです。主があなたに立ち向かうということの反対語です。すなわち、自分が主に対して犯している罪について、それを悔い改め、主に立ち返ったので、主がその罪をすべて赦し、主が味方してくださっていることを意味しています。主が、そのことの約束を、インマヌエル、神が共におられるということで、イエス様をマリヤから聖霊によって生まれさせることによって、実現されました。

1:14 主は、シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルの心と、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアの心と、民のすべての残りの者の心とを奮い立たせたので、彼らは彼らの神、万軍の主の宮に行き、仕事に取りかかった。1:15 それは第六の月の二十四日のことであった。

彼らが仕事にとりかかりました。第六の月の24日ですが、9月21日のことで、秋の祭りの大贖罪日の16日前のことです。彼らがハガイの預言を聞いたのは、8月29日だったのですが、また資材を集めるなど、準備が必要だったのでしょう。また、収穫が忙しく、大きな安息の期間がやってくるまでに、収穫を終わらせようとしていたのかもしれませんが。休む間もなく、建設にとりかかったに違いありません。

## 2A 「後のことを考えよ」

ここまでが「現状をよく考えよ」という主の言葉でありました。次の2章は、「後のことを考えよ」ということです。工事を再開して、遅々として進まないという圧迫と戦い、その中で主は「後のことを考えよ」と、将来の希望をもって励ましておられます。

### 1B 以前に輝く栄光 1-9

2:1 ダリヨス王の第二年の第七の月の二十一日に、預言者ハガイを通して、次のような主のことがあった。

太陽暦では520年10月17日にあります。仮庵の祭りの最終日になります。十五日から仮庵の祭りが始めて七日間行ないませんが、二十一日は七日目になります。八日目に全き休みがあり、それから再び労働をしてよい日が始まります。彼らが仮庵の祭りを終え、仕事を再開させる時に主が、前もって語ってくださったのです。

2:2 「シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアと、民の残りの者とに次のように言え。2:3 あなたがたのうち、以前の栄光に輝くこの宮を見たことのある、生き残った者はだれか。あなたがたは、今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。

初めのハガイの預言は、ゼルバベルとヨシュアに対しての言葉であると書かれていましたが、ここでは「民の残りの者」も加えられています。

バビロンによって神殿が破壊されたのは、紀元前 586 年です。今が紀元前 520 年ですから 66 年前の出来事でした。70 代以上の老人であれば、当時の神殿を思い出すことができます。ソロモンが建てた神殿の栄華は、息が止まるばかりのものでした(1列王 10:7 参照)。そしてエズラ記には、エルサレムに戻ってきた人々が、神殿の土台を建てることができたので、その感謝と賛美をささげるために集まってきた話があります。そこで、祭司たちが賛美を指揮したのですが、一方では喜びの叫び声がかして、他方では大きな泣き声が聞こえました。喜び叫ぶ声は、ソロモンの神殿を目撃していない、比較的若い人々からのものです。礎を見て、こんなにすばらしいものが出来た、と喜んだのです。しかし同じ礎を見て、年寄りの人々は嘆き悲しんだのです。ソロモンの神殿に比べたらあまりにも見劣りするものだったからです。エズラ記には、「3:13 そのため、だれも喜びの叫び声と民の泣き声とを区別することができなかった。民が大声をあげて喜び叫んだので、その声は遠い所まで聞こえた。」とあります。主は、年寄りたちの嘆きを聞いて、「あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。」と仰っています。

私たちが主にあって信仰的に前進するとき、主のわざに励んでいるとき、私たちをがっかりさせてしまう要素は、自分の目に見える現状です。あまりにも小さい働き、あまりにも小さい事柄にしか見えないことだらけです。主が示してくださった幻とは比べ物にならず、情けなくなります。ここの残りの者と同じように、過去と比べることもあるでしょう。あるいは、他人と比較もすることがあるでしょう。あの人はこんなに成功しているのに、自分はいったい何なんだろう。パウロは、コリントにある教会に対して比較意識を戒めました。「彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです。(2コリント 10:12)」

2:4 しかし、ゼルバベルよ、今、強くあれ。・・主の御告げ。・・エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ。強くあれ。この国のすべての民よ。強くあれ。・・主の御告げ。・・仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。・・万軍の主の御告げ。・・2:5 あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな。

「強くあれ」という励ましの言葉を、一人ひとりにかけておられます。ゼルバベルに、ヨシュアに、そしてすべての民にそれぞれに対して呼びかけておられます。モーセの後継者のほうのヨシュア

が、モーセが死んで、自分一人でイスラエルを率い、約束の地で先住の民と戦わなければいけなかった時のことを思い出してください。主が、「ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。(ヨシュア 1:7)」と言われました。今、主が、エジプトから出た時の約束によって、ご自分の御霊で彼らを運ばせてくださったことを思い起こさせています。ですから、まさにヨシュアがヨルダン川を渡り、神の御霊の力によって約束の地に踏み入れたことを思い起こさせているのです。そして仕事にとりかかるとは、神殿を建てるのですが、そこには知恵や知識が必要です。モーセが幕屋を造る時に、主はその祭具を作るベツアルエルとオホリアブに対して、「出エジプト 31:3 知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。」とあります。ですから、そのような頭を使わなければいけない仕事においても、神が御霊によって働いてくださり、強めてくださるのです。

私たちは絶えず、弱くなってしまうその心を、主の力によって強められないといけません。パウロは、私たちの内なる人が強められることを話しています。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいませように。(エペソ 3:16)」神の栄光の豊かさによって、また御霊によって強められます。

2:6 まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。2:7 わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。2:8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。..万軍の主の御告げ。..

主は、とてつもなく大きな終わりの日の幻をお見せになりました。ヘブル書には、ここのハガイ書を引用して、国々を揺り動かし、天地を揺り動かした後の、神の国の到来のことを話しています(ヘブル 11:26-28)。かつて、ヒゼキヤが王であった時にアッシリヤにエルサレムが取り囲まれ、しかし主の使いが18万5千人のアッシリヤ軍を倒した後に、尊敬がヒゼキヤ王に集まり、国々が贈り物を持ってきたという話があります(2歴代 32:23)。これは、イザヤ書 60 章において終わりの日には、主が国々を揺り動かし、天地を揺り動かして、ご自身が天から戻って来られると、エルサレムには国々がその贈り物、黄金も携えて来ることが預言されています。この幻をもって、今、ちっぽけに見えるゼルバベルとヨシュアたちの再建工事にも、国々からの贈り物が来ることを約束しておられるのです。事実、エズラ記にはダリヨス王が、かつてのクロス王のように神殿建設をペルシヤの国庫によって援助するようにさせている記録があります。

私たちは、御国の子供です。ですから、「銀はわたしのもの。金もわたしのもの。」という、神のくださった余裕が与えられています。全ての金銀が神のものなのですから、神はご自分の御心にかなうことを、行なうことのできる能力が有り余るほどあります。ですから、私たちは主の働きのために自分自身を捧げます。ハガイ書の次の次の書物が、マラキ書です。主は、ご自分の豊かさにし

たがって、試しなさいと命じられました。「マラキ 3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」これが主の原則です。私たちが、その豊かさにあずかることができるように、私たちの持っているもので試しなさいということです。エリヤが、僅かにしか小麦粉と油を持っていない寡に対して、「私にパンを初めに造りなさい」と言いました。イエス様は、群衆の中から五つのパンと二匹の魚しか集めさせた弟子たちに、それを持ってこさせました。それは、私たちのものを奪い取るためではなく、正反対で、私たちに惜しみなく施すために、捧げなさいと命じておられるのです。

2:9 この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。・・万軍の主の御告げ。・・」

ユダヤ人の老人は、今の建築中の神殿とかつてのソロモンの神殿を比べていました。けれども、主はかえって、ソロモンの神殿よりもさらにすぐれた、栄光に輝く神殿となると約束されています。終わりの時の神殿の青写真が、エゼキエル書 40 章以降にあります。確かにソロモンの神殿をはるかに凌ぎます。私たちは前進する時に、「今より状況が悪くなるのではないか？」という恐れが出てきます。ただでさえ前よりも少なくなっているのに、もっと少なくさせるのか？という思いも出てきや知れません。しかし今あるものよりも、実はさらに優れたものをもたらししてください。

そして、「この所に平和を与える。」と約束されています。かつてソロモンの治世において、その繁栄において、平和が広がっていました。そして終わりの日には、平和の君イエスによって、あらゆる国々の富によって、平和と繁栄が広がります。今、周囲に神殿建設に反対する敵がいます。また、彼らの中でも労苦と内なる戦いの中にいました。平安が必要でした。そこで主は平和を約束されています。私たちにも、平和の神が共にいてくださるのです(ピリピ 4:9)。

## 2B 再建の日からの祝福 10-19

2:10 ダリヨスの第二年の第九の月の二十四日、預言者ハガイに次のような主のことばがあった。

520 年 12 月 18 日です。この日は、工事にとりかかった第六の月の二十四日のちょうど三か月の記念日でもあります。

2:11 「万軍の主はこう仰せられる。次の律法について、祭司たちに尋ねて言え。2:12 もし人が聖なる肉を自分の着物のすそで運ぶとき、そのすそがパンや煮物、ぶどう酒や油、またどんな食物にでも触れたなら、それは聖なるものとなるか。」祭司たちは答えて「否。」と言った。2:13 そこでハガイは言った。「もし死体によって汚れた人が、これらのどれにでも触れたなら、それは汚れるか。」祭司たちは答えて「汚れる。」と言った。

興味深い、祭司についての規定です。一つ目の質問についてですが、レビ記 6 章にこう書いてあります。「罪のためのいけにえをささげる祭司はそれを食べなければならない。それは、聖なる所、会見の天幕の庭で食べなければならない。その肉に触れるものはみな、聖なるものとなる。(26-27 節)」聖なるものとなった肉に触れると聖められるのですが、けれども、聖められた者のすそに、他の食べ物が触れたらそれも聖められるのか、という質問です。祭司の答えは「否」です。けれども、その逆は真です。だれかが死んで、葬儀のときにその死体を運んだりしなければいけません。その人は夕方まで汚れていて、その人が触ったものも汚れることが律法で定められています。

ここに「聖め」と「汚れ」についての、非常に大切な原則が二つあります。一つは、「聖め」は他の人から他の人へ伝播させることはできない、ということです。一人ひとりが、聖なる方、神に触れられないかぎり、聖められることはない、ということです。私たちが教会の中において、他のクリスチャンたちといっしょにいるから自分は聖いのだ、と考えたら間違いです。自分自身が聖い方キリストにつながらないといけません。そしてもう一つの原則は、「汚れ」は伝染する、ということです。汚れの源泉にいなくても、源泉によって汚れたに触れたら、自分も汚れます。私たちは、自分が汚れたことをしなければ、汚れたものの近くいても大丈夫だと思ってしまう。また、汚れたものを見ても、実際に行かないのなら大丈夫と思ってしまう。けれども必ず、それは私たちの思いを蝕みます。それから私たちの感情、霊的状态、そして最後に物理的にもその腐敗が現れます。

2:14 ハガイはそれに応じて言った。「わたしにとっては、この民はそのようなものだ。この国もそのようである。…主の御告げ。…彼らの手で作ったすべての物もそのようだ。彼らがそこにささげる物、それは汚れている。

主は再び、彼らが神殿建設を再開する前の彼らの状態を思い起こさせています。なぜ、そうってしまったのかを、聖めと汚れの原則に照らして説明しておられます。彼らは祭りを行ない、いけにえを捧げていましたが、ただ一つ、主の家を建てることをないがしろにしていたという心の中の汚れがありました。そのために、どんなに良い行ないをしたところで、心の中の一つの汚れが他のものに伝わり、彼らが行なう全てのことに影響を与えていたのです。主が行ないなさいと命じられていることを行なわないなら、他のいかに宗教的行為をしたところで、その不従順による汚れは伝播するのです。

2:15 さあ、今、あなたがたは、きょうから後のことをよく考えよ。主の神殿で石が積み重ねられる前は、2:16 あなたがたはどうであったか。二十の麦束の積んである所に行っても、ただ十束しかなく、五十おけを汲もうと酒ぶねに行っても、二十おけ分しかなかった。2:17 わたしは、あなたがたを立ち枯れと黒穂病とで打ち、あなたがたの手がけた物をことごとく雹で打った。しかし、あなたがたのうちだれひとり、わたしに帰って来なかった。…主の御告げ。…

1章では、「現状をよく考えよ」と主は言われましたが、ここでは「今日から後のこと」です。いわば、カレンダーに第九の月の二十四日のところに印を付けておきなさい、と命じられています。今、収穫してから三ヶ月経過していますが、すでに穀物倉には種がなくなっていました。それだけ不作だったのです。そして、ぶどうの木も、いちじくの木も、ざくろの木も、オリーブの木も、実を結ばないまま冬を迎えています。そして彼らは、このような状態にあっても、主に立ち返ることさえしませんでした。しかし今、立ち返っています。その食べ物が事欠いている中で、神殿建設にとりかかっています。

2:18 さあ、あなたがたは、きょうから後のことをよく考えよ。すなわち、第九の月の二十四日、主の神殿の礎が据えられた日から後のことをよく考えよ。2:19 種はまだ穀物倉にあるだろうか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結ばないだろうか。きょうから後、わたしは祝福しよう。」

主は、今日からカレンダーに印を付けなさい。そして、よく考えたら、この日から主が確かに私たちを祝福された、ということが分かるようにさせる、とおっしゃられています。後から、「ああ、あの日からだったのだ！」と分かるようにさせていただきます。私たちも同じです。私たちは、悔い改めて主に従う、あるいは主からずっと離れていたけれども戻ってきて主に従うことを始めて、すぐには大きな変化を見ることはできないでしょう。ちょうど作物のように、時間が経って始めて、自分の生活から実が結ばれていることを確認するでしょう。状況はあまり変化しているように見えなくても、私たちが悔い改めたら、確実に内側から変えてくださるのです。実を結ばせるには時間がかかります。けれども、必ず祝福されます。

### 3B 選り取られるゼルバベル 20-23

2:20 その月の二十四日、ハガイに再び次のような主のことばがあった。2:21 「ユダの総督ゼルバベルに次のように言え。わたしは天と地とを揺り動かし、2:22 もろもろの王国の王座をくつがえし、異邦の民の王国の力を滅ぼし、戦車と、それに乗る者をくつがえす。馬と騎兵は彼ら仲間同士の剣によって倒れる。

先の預言と同じ日に、今度は指導者ゼルバベルに対する神の励ましの約束がありました。それは、異邦の民の国々がくつがえされ、その軍隊も倒れる、というものです。彼には必要な励ましでした。周囲は敵に囲まれています。これから自分たちが襲われるかもしれません。しかし主は、これらの異邦人の攻撃をすべて無き物にすることを約束されています。彼にとっては、自分のしていることがとても小さい事業のように見えます。異邦人の力に踏みつぶされてしまうような、虫けらのように感じるかもしれません。けれども、国々を支配される主は、エルサレムのためにこれらの勢力に対して戦ってくださるのです。次のゼカリヤ書 12-14 章に、この幻がさらに詳しく示されています。今、私たちは世界で、国々が揺れ動き、天地までも自然現象が揺れ動いている姿を見ていま

す。これは、まさに私たちが福音宣教をしていかなければいけない徴であります。

2:23 その日、・・万軍の主の御告げ。・・シェアルティエルの子、わたしのしもべゼルバベルよ、わたしはあなたを選び取る。・・主の御告げ。・・わたしはあなたを印形のようにする。わたしがあなたを選んだからだ。・・万軍の主の御告げ。・・」

ここの選びというのは、ゼルバベルに対してまさに、彼の子孫の中からキリストが現れることを示した預言です。「印形のようにする」とは、王の指輪のことであり、王が確実にこの者を選び、ご自分の国を、働きを行なうことを確認しているものです。イザヤがキリストを預言して言いました。「42:1 見よ。わたしのささえるわたしのしもべ。わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。」主イエスは、バプテスマを受けられる時に、この言葉をもって公生涯を始められました。ゼルバベルは今、主に選ばれ、しもべとして選ばれています。これは後にキリストが打ち立てられる御国を予め示すものなのです。私たちにも、キリストがおられます。小さな働きのように見えて、後の来る御国を現すものとなります。

それでハガイとゼカリヤの預言があつてから4年後、紀元前516年に神殿が完成しました。エレミヤの預言どおり、神殿が破壊されてからちょうど70年後です。彼らは喜んで奉獻式をお祝いし、また過越の祭りを楽しみました。エズラ記6章22節にこう書いてあります。「そして、彼らは七日間、種を入れないパンの祭りを喜んで守った。これは、主が彼らを喜ばせ、また、アッシリヤの王の心を彼らに向かわせて、イスラエルの神である神の宮の工事にあたって、彼らを力づけるようにされたからである。」主が力づけ、喜ばせてくださいました。主は、どんな小さな集団でも、それに心を留め、限りない愛情を注いでくださいます。どんなに些細に見える新しい事であっても、信仰による前進は神にとってとてつもなく大きな出来事なのです。